



「絶対アンバーおねえさんは隠し忘れている！！！！！！」

コート

目的地へと走るコート。

そこには今にもビール缶を開封しようとしているアンバーがいた。



「あらー、見つかった？」

アンバー



「今から見つけるんだあああああ」

コート

コートはアンバーをブルーシートの上でひっくり返した。

ぐえ。

アンバーの声。

アンバーが転がると、そこにはプレゼントと思わしき包装が下敷きになっているではないか！



「勝利」

コート



「あれ？私って隠してなかったんだっけ」

アンバー



「愚か」

コート



「じゃあ中身みちやおうよ！」

フド

ぺりぺり。

丁寧に包装紙を開けると、絵本の表紙のようなものが見えた。



「きゃー、目の前で読まれるのは恥ずかしいわね」

アンバー



「……これってもしかして、おねえさんが書いたの？」

コート

逡巡。

少しの沈黙の後に、アンバーは首だけで頷いた。

絵本の表紙のイラストは丁寧に描かれているけれど、お世辞にも綺麗とは言えなかった。

タイトルには「ぼろ布のハンス」と書かれている。

『ぼろ布のハンス』

あるところにとってもボロボロなお姫様がいました。  
なんとって従者に裏切られて川に突き落とされてしまったのですから。  
オシャレなドレスはびしょぬれ、高い靴はヒールが折れて泥まみれ。  
綺麗な顔だって濡れていましたが、そこに涙はありません。  
お姫様は川から出ると濡れた服を絞って自分の影に被せ、こう言いました。  
「あなたも寒かったですか？ さあ、温まりなさいな」  
彼女には友がおりました。  
その友は喋れず—姿も誰にも見えませんが—  
いつでも、いつだって、自分の側にいてくれました。  
彼女は友達がいればどんな困難にだって立ち向かうことができました。  
神様が見てなくたって、光に照らされなくたって。  
いつでも、側にいてくれました。



フー

「これは……なかなか難しい絵本だね……」



コト

「子どもが読んだら首傾げちゃうよ」



アンバー

「うるさいわね。別に応募とか販売とかをするわけじゃないわよ」



コト

「あ、そうなの」



アンバー

「ま、要は世界にあるのは太陽だけじゃね—ってことを言いたいだよ」



アンバー

「目をつむっているから分からないだけで、夜も昼と同じくらい長いんだから」



コト

「なるほど？」



アンバー

「ま、視野を狭めるなってことよ」

ぷしゅ。

缶を開けてアンバーはお酒を飲み始める。

もう話すことはないということだろう。



かえ みち  
帰り道。

ふたり くら みち ある  
二人はすっかり暗くなった道を歩く。

がいとう て み かく ひょうじょう み ほ すす  
街灯に照らされて見え隠れするフードの表情を見つめながら、コートも歩を進める。



「おっと。もう着いちゃった」

たくさん がいとう て さか はいけい あし と  
沢山の街灯が照らしている坂を背景に、フードは足を止めた。

この坂を登ればコートの家、下ればフードの家だ。



あした しぎょうしき  
「明日は始業式だからね！」

フードの背中に声をかける。



「あ、まだ上履き洗ってないや」



かわ じかん ぜつぼうてき  
「乾かす時間が絶望的じゃん」



いそ  
「急いでブラシしないと……」

あわ と みだ おも まえ すす さか あし  
慌てて取り乱すフードをほほえましく思いながらコートは前に進み、坂に足をかけた。



「また明日！」



らいねん にん まつ い  
「来年も3人でお祭りに行こうね！」

その声に振り返ると、急いで帰ろうとするフードの後ろ姿は既に小さくなっていた。

がいとう あか て わたし き みおく  
街灯の灯りに照らされながら、私は消えていくフードを見送った。

きょう まつ たの  
今日のお祭り、楽しかったな。

いえ かえ わたし ほほえ ね したく  
家に帰った私は微笑みながら、寝る支度をするのであった。

よる ふ  
夜が更けていく……。